

1 岩倉公画伝草稿絵巻

田中有美

二十一巻

絹本着色 明治二十三年(一八九〇)頃
縦四三・八(四八)・〇
長一二七・七(二八二)・九

岩倉具視(一八二五〜一八三三)の生涯を全二十一巻にまとめた絵巻である。作者の田中有美は、この岩倉の一代絵巻に取りかかった後、三条実美、さらにその父実万の事蹟絵巻を続けて手がけることとなる。宮内省のもとでの有美の絵巻制作の最初の作例としても、非常に重要な意味を持つものである。

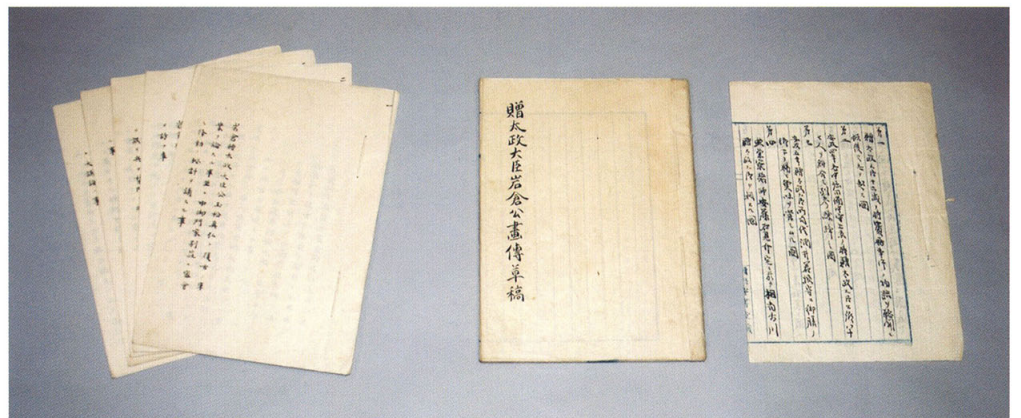
しかし作品名に「草稿」とある通り、本作品は絵巻として完成したものではない。各巻の法量や装丁が統一されておらず、また詞書も付いていない。表紙や見返し等には何ら装飾性がなく、仮表装の体裁をとっている。ただし絵の部分に関して言えば、細部まで描き込まれた上に濃彩で着色が施され、決して下絵などではなく本画として完成していることは間違いない。

制作の経緯については不透明な点も多いが、『明治天皇紀 第六』によると、明治十六年(一八八三)七月に岩倉具視が没して間もなく、「贈太政大臣岩倉具視の勲功を追思し、勅撰の碑文を賜ひ、其の功績を旌表せしめたまふ、即ち是の日宮内少輔香川敬三をして具視の行状を取調べ、編修副長官重野安繹に命じて碑文を撰ばしめたまふ、尋いで又元老院権少書記官城多董・太政官御用掛山本復一に行状取調を命ぜらる」(明治十六年八月七日条)とあり、明治天皇の御意向で岩倉の事蹟取り調べが始められたことがわかる。この調査は、次第に本格的な年譜の編纂へと発展し、明治二十、二十一年頃には『岩倉公実紀』の刊行に向けた動きが始まった。そうした流れの中で、この編纂事業から派生する形で、岩倉の事蹟を題材にした絵巻の制作が計画され、田中有美が御下命を受けその任にあたることになったと考えられる。

ただし、有美が絵巻制作の命を受けた時点で年譜編纂事業は進行途上であったため、制作にあたっての資料、具体的に言えば詞書の草稿も揃っていない状態であったと推察される。ちなみに本絵巻には、本来絵巻に附されるはずであった詞書の草案と考えられる数種の冊子が付属している。そしてその他にも、国立公文書館内閣文庫に「贈太政大臣岩倉公事蹟絵詞稿(二冊)」と「贈太政大臣岩倉公事蹟絵巻詞草案」(三冊)が現存しており、詞書は何段階か編纂が重ねられた様子が見える。有美は手探りで下絵制作から着手し、さら

に絹本着色の本画制作に取りかかるものの、詞書制作の方の遅延により途中からは絵の方の制作も中断するような状況に陥ったと考えられる。さらに明治二十六年には新たに三条実美の事蹟絵巻の制作が命じられ、有美は本絵巻の制作から手を放さざるを得ない状況となったのだろう。こうして絵は先にある程度完成しながらも、詞書制作が遅れたことによりやむを得ず仮表装の形をとったものと考えられる。

絵巻の詞書は、明治四十年代によく『岩倉公絵巻物詞書』という上下冊の活字本として完成し、非売品として関係者にわずかに配布された。その内容を見ると本絵巻全二十一巻と過不足なく一致する。本絵巻の揮毫は有美がそのほとんどを手がけたものと考えて間違いないが、中には第十五巻のように画風からして明らかに別人の筆と思われる巻も含まれている。おそらくは有美が制作から手を引いた後、出来上がった完全版の詞書に合わせて、足りない箇所を別の画家が補充したものと思われる。絵巻は一卷毎に画題と巻数が墨書された紙で包まれているが、中には巻数が記されていない巻も含まれており、これら巻数表記のないものは、やや制作時期が異なる可能性が高い。ここでは便宜的に、各巻を描かれた場面の時系列で並べ、第一巻から第二十一巻まで番号を振って紹介することとした。各巻の内容を次に示すが、各文末括弧内に示した巻数は、包み紙に墨書されている数字である。



絵巻の付属資料

【第一卷】祖父具集より宝曆年中御所騒動の物語を聴く。(巻一)
 【第二卷】安政五年三月、公家八十八人列参を計画する。(巻二)
 【第三卷】万延元年四月、所司代酒井忠義に御膳について諷諭。(巻三)
 【第四卷】万延元年九月、庭田重胤の家臣、具視の相を観る。(巻四)
 【第五卷】文久元年十一月、和宮親子内親王東下に供奉する。(巻五)
 【第六卷】同月、江戸城において將軍自筆の誓書を受ける。(巻六)
 【第七卷】文久二年九月、勅勘を蒙り西賀茂靈源寺に避難する。(巻七)
 【第八卷】文久二年十月、岩倉村に幽居する。(巻八)
 【第九卷】文久三年二月、千種有文家臣の腕が岩倉邸に送り付けられる。／花園村の農家に潜伏する。(巻九)
 【第十卷】慶応三年、玉松真弘と国事を談ずる。／大久保利通、品川弥二郎に秘計を示す。(巻十)

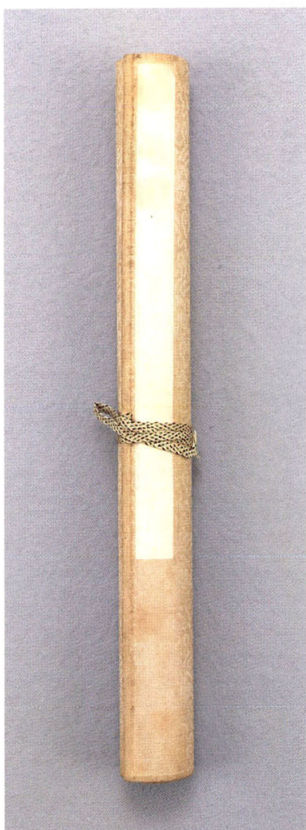
【第十一卷】慶応三年十月、密かに中山忠能を訪う。(巻十一)
 【第十二卷】慶応三年十二月八日夜、王政復古発令前夜の岩倉邸。(巻十二)
 【第十三卷】十二月九日朝、参朝する。／薩摩藩兵、宮門に入る。(巻十三)
 【第十四卷】十二月九日夜、小御所会議。(巻十四)
 【第十五卷】明治元年九月、御東幸に供奉する。(巻数表記無し)
 【第十六卷】明治四年十一月、特命全權大使となり横浜港より出帆する。(巻十五)
 【第十七卷】明治六年十月、西郷隆盛らと征韓論を戦わせる。(巻十六)
 【第十八卷】明治七年一月、赤阪喰違にて襲われる。(巻数表記無し)
 【第十九卷】明治九年十二月、岩倉村別荘に村民らを招いて宴を催す。(巻十七)
 【第二十卷】明治十六年七月、病床の岩倉慰問のため臨幸がなされる。(巻十八)
 【第二十一卷】明治十六年七月、国葬が執り行われる。(巻数表記無し)
 絵巻は、第九卷、十卷、十三卷のみ一巻の中に二つの場面が描き込まれているが、その他は一巻につき一場面のみで、絵巻の長さとしては短い巻が多い。ただ、中には第五卷の和宮内親王降嫁の行列や第十六卷の横浜港出港の場面、第二十一卷の国葬の行列などのように、絵巻の特性をいかした横へ横へと画面が続く巻もある。

有美の画風に着目すると、人物を描く筆線はやわらかく、衣服の輪郭や皺などはやや抑揚をつけ、面貌や毛髪は繊細な線で描かれている。また、筆線の表情をいかそうとする箇所は彫り塗り(描線を塗りつぶさず彩色する方法)で表し、逆に淡い色の衣服などは輪郭線の上から彩色し、墨線を強調しすぎない工夫が

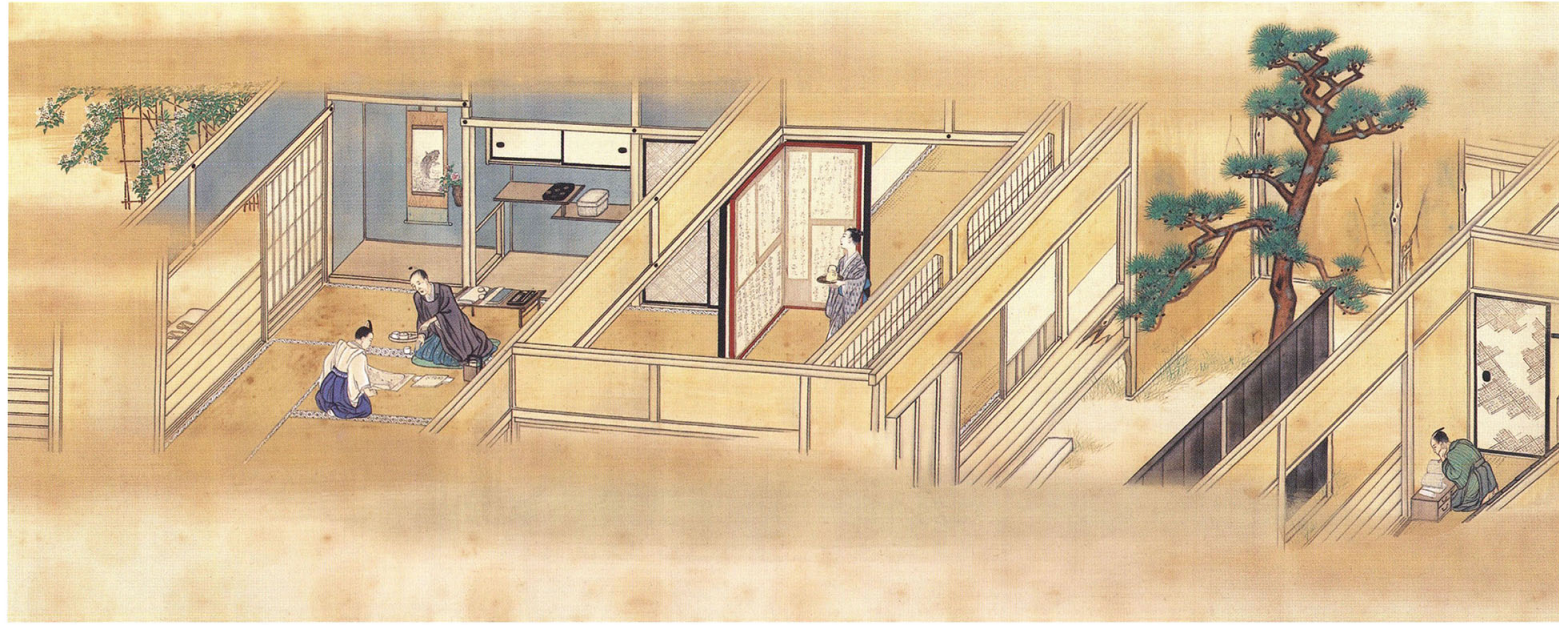
認められる。彩色は全体的に濃彩であり、金泥による霞が全巻を通して入れられている。また、物の陰影や立体感を表す隈取りがしっかりと濃淡をつけて用いられ、画面に独特の濃厚さを生み出している。

主人公の岩倉具視は当然各巻に登場するが、その面貌描写は写真なども参考にしたと思われる、非常に写実的でその特徴をよくとらえている。その上で加齢による変化や、不遇の環境下でのやつれた様子など様々な表情で描き分けている。その他にも大久保一蔵(利通)や中山忠能、小御所会議の面々など、主要な登場人物の幾人かは岩倉と同様に写実的な面貌で描かれている。ただしその他の脇役や群衆の一人一人が無個性に描かれているかと言えばそうではなく、むしろ喜怒哀楽をあらわにした豊かな表情で描き分けられ、やや戯画的な印象を与える。有美は数多くの古典絵巻の模写をする中で、話の本筋とは関係のない箇所でもひとりひとりの人物たちが生き生きとした姿で描き込まれていることに強い影響を受けたものと思われる。この他、家屋の軒先に咲く草花や室内の屏風や襖、様々な器物など画面を構成するあらゆるモチーフが手を抜くことなく描かれ、特に草木は必要以上に緻密に描き込まれ、有美自身の嗜好が垣間見える。

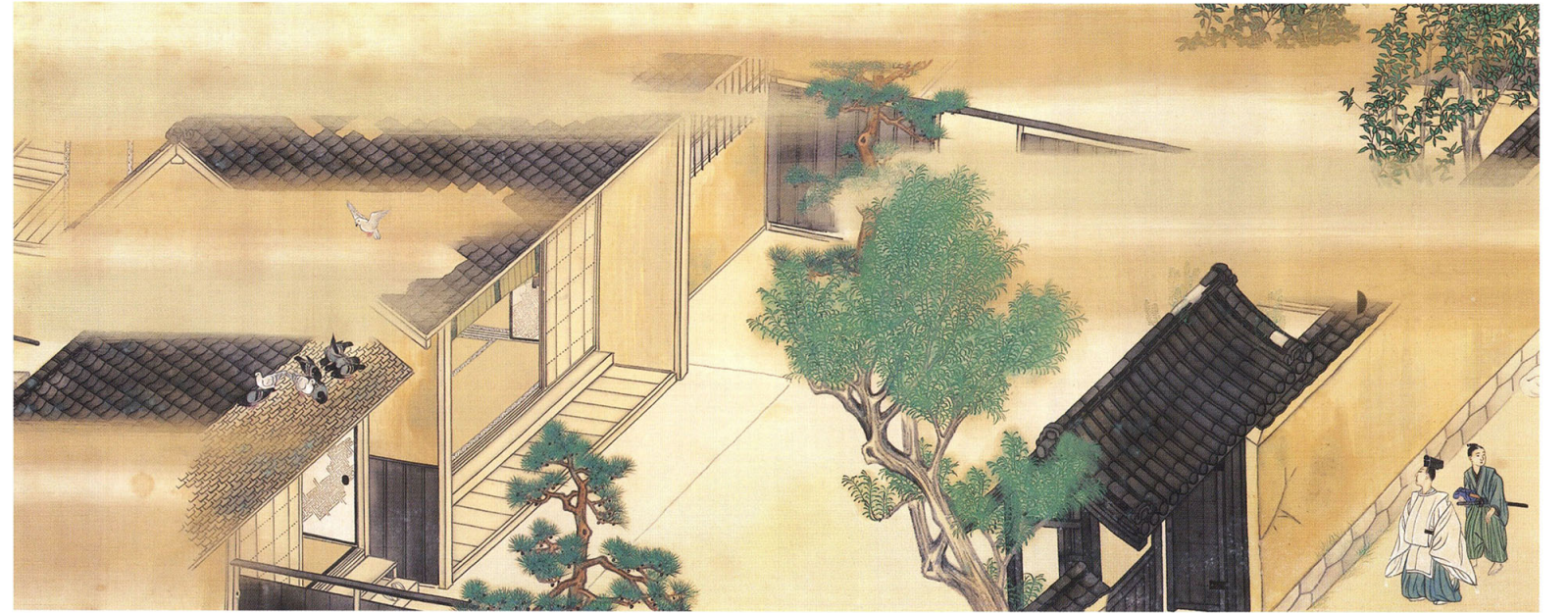
宗祖や偉人、権力者など特定の人物の事蹟を、物語形式で描いた絵巻の名品は「西行物語絵巻」や「一遍上人絵伝」など様々あり、有美はそうしたもののいくつかは模写していたはずであるが、岩倉具視という自分と同時代に生きていた人物の一代絵巻の制作はやはり簡単ではなく、実在の人物や実際の風景とかげ離れることがないよう整合性を保ちながらの画面構成や場面展開に苦心した様子が見受けられる。そうした若干のぎこちなさは、これ以降有美が手がけることとなる「三条実美公事蹟絵巻」(作品番号2)「三条実万公事蹟絵巻」(作品番号3)では解消されていく。



巻姿



14歳(嘉永3年・1850)の頃、祖父具集(ともあい)より皇朝の歴史を学ぶ。



第1巻



安政5年(1858)3月、日米修好通商条約調印への勅許を阻止するため、公家88名による列参を計画。

第2巻



文久元年(1861)11月、和宮内親王、將軍家茂との婚礼のため江戸城へ入城。

第5巻



和宮内親王の乗る唐鹿青糸毛車



行列に供奉し前駆を務める岩倉



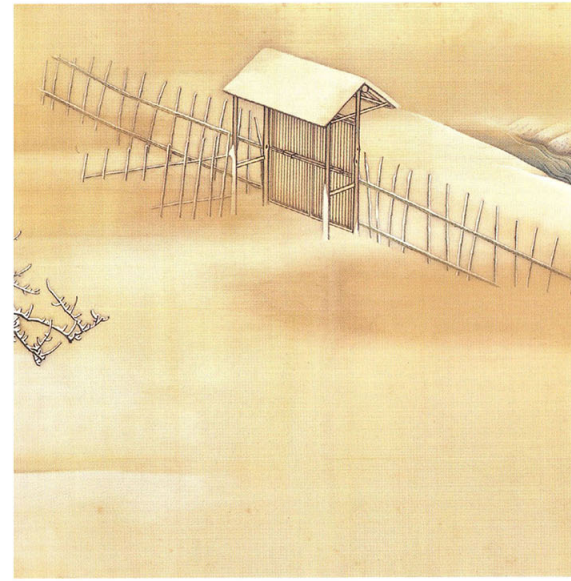


文久2年(1862)9月、和宮降嫁幹旋から佐幕派とみなされ苦境に立たされたため西加茂霊源寺に逃れる。

第7巻



10月、洛北岩倉村の庵に隠栖。自ら炊事の労を取る。子の具定と八千丸これを助ける。

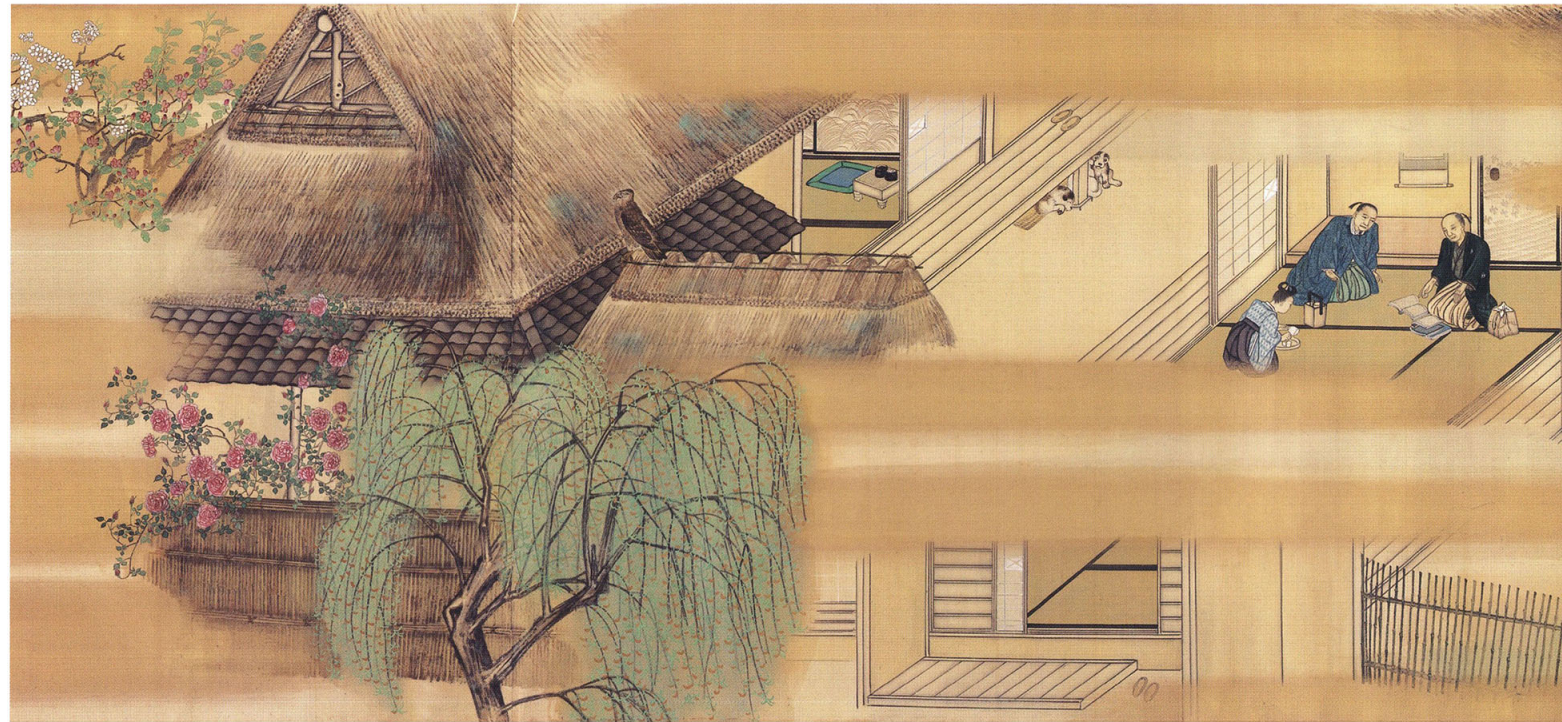


第8巻



過激な尊攘派の手がのびてきたため、花園村の農夫の家に身を寄せる。

第9巻



慶応3年(1867)、岩倉村に幽居の間も玉松真弘を招き、王政復古について協議する。



第10巻



中御門経之別荘にて大久保利通、品川弥二郎と密会し、倒幕の秘計を示す。





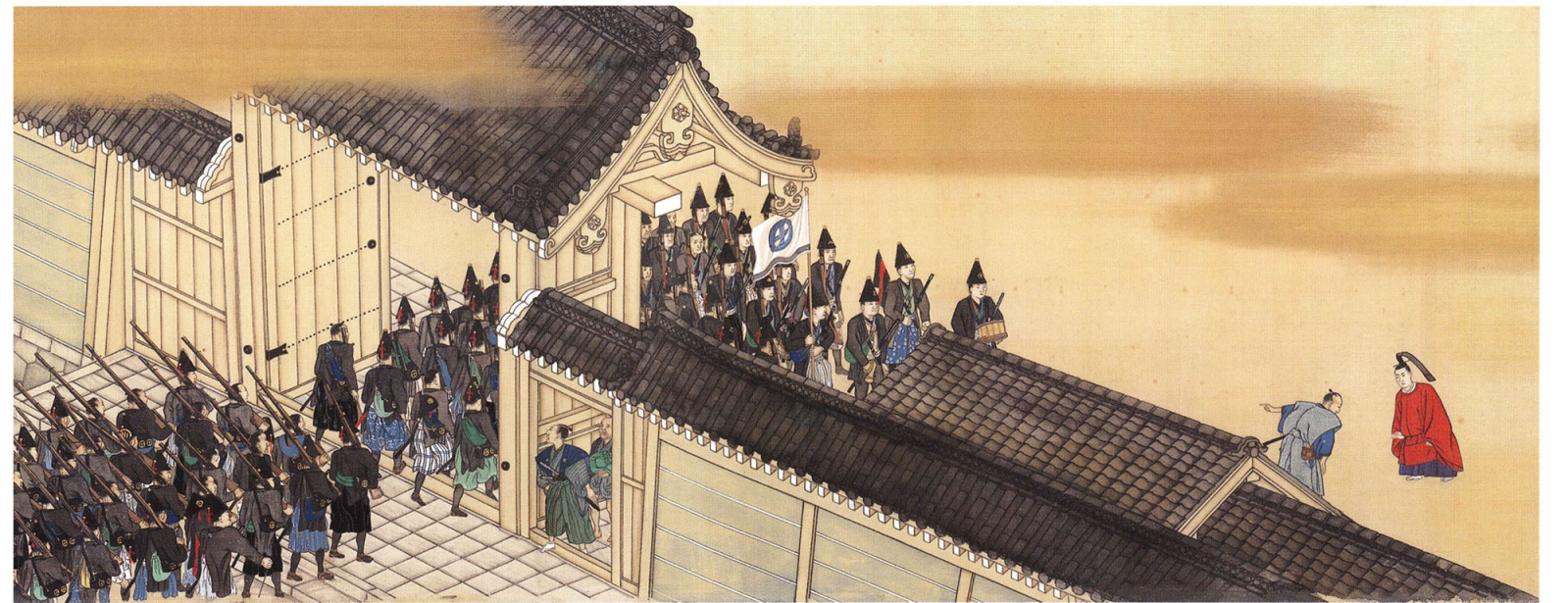
12月9日、王政復古の発令のため衣冠を着け参朝する。 第13巻



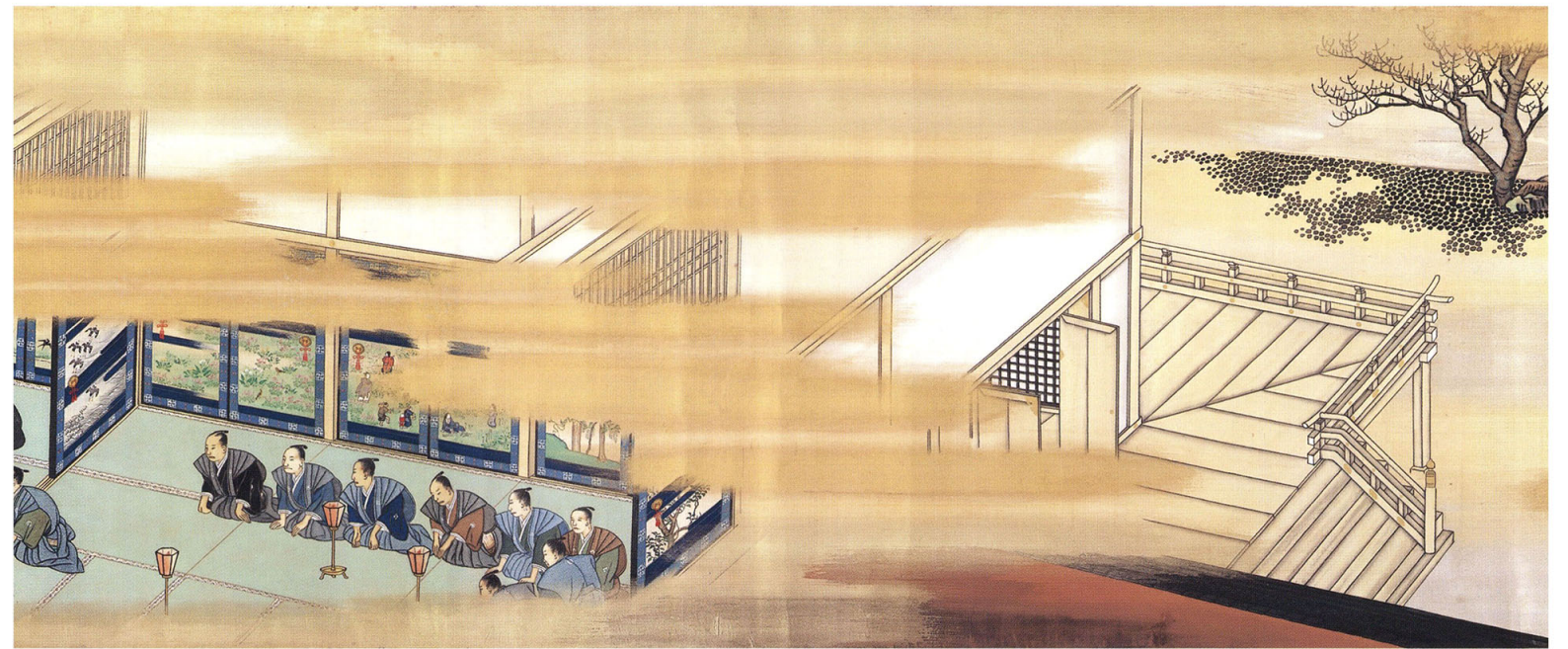
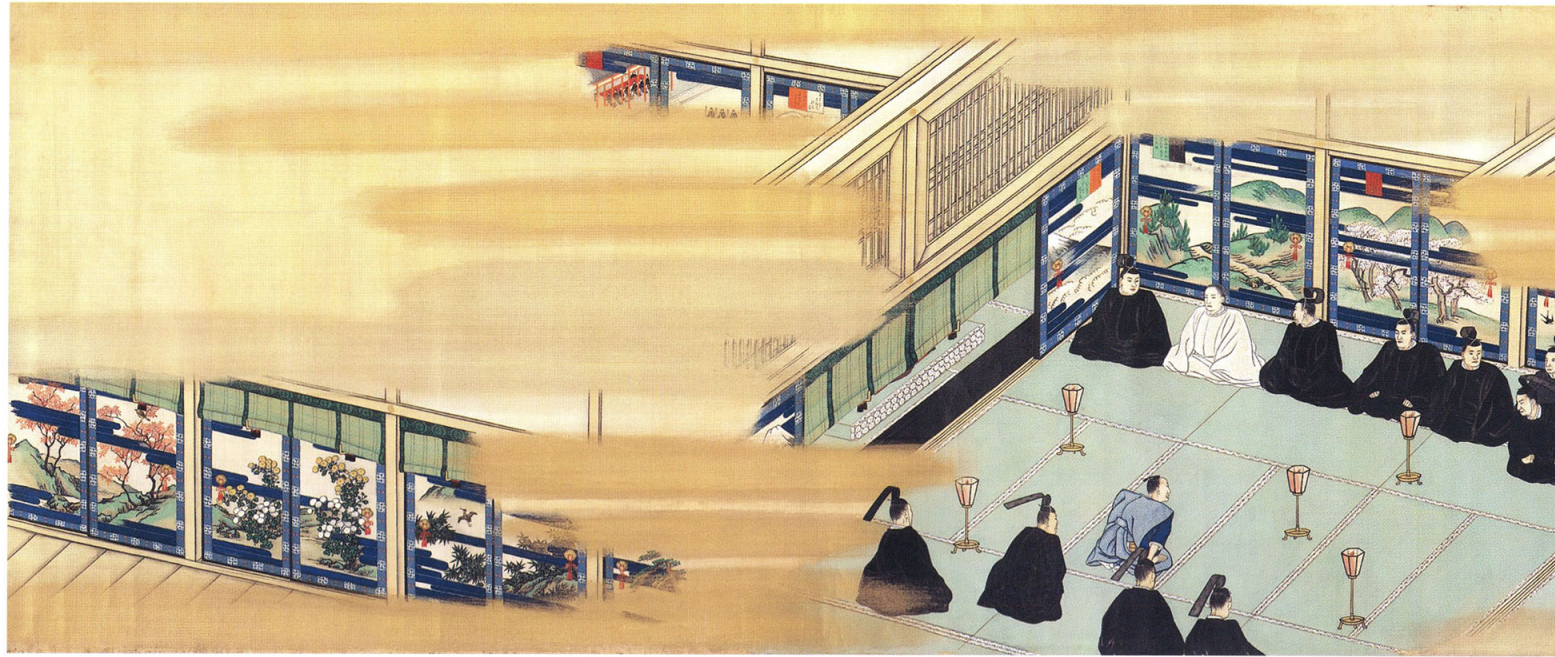
慶応3年(1867)12月8日夜、王政復古発令前夜の岩倉邸 第12巻



御所守衛のため清所門より入門する薩摩藩の兵士たち



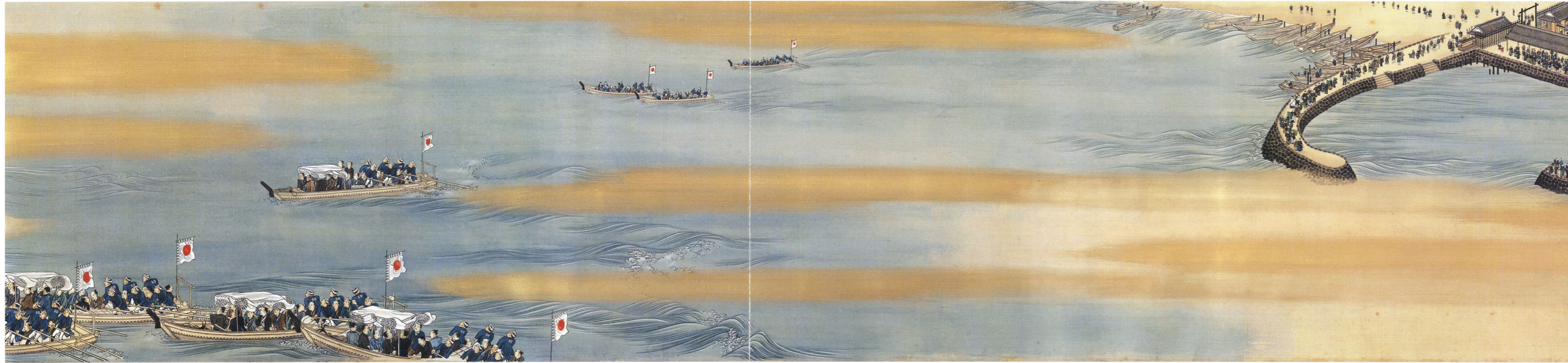
西郷吉之助(隆盛)を出迎える岩倉具定 第13巻



慶応3年(1867)12月9日夜、小御所会議



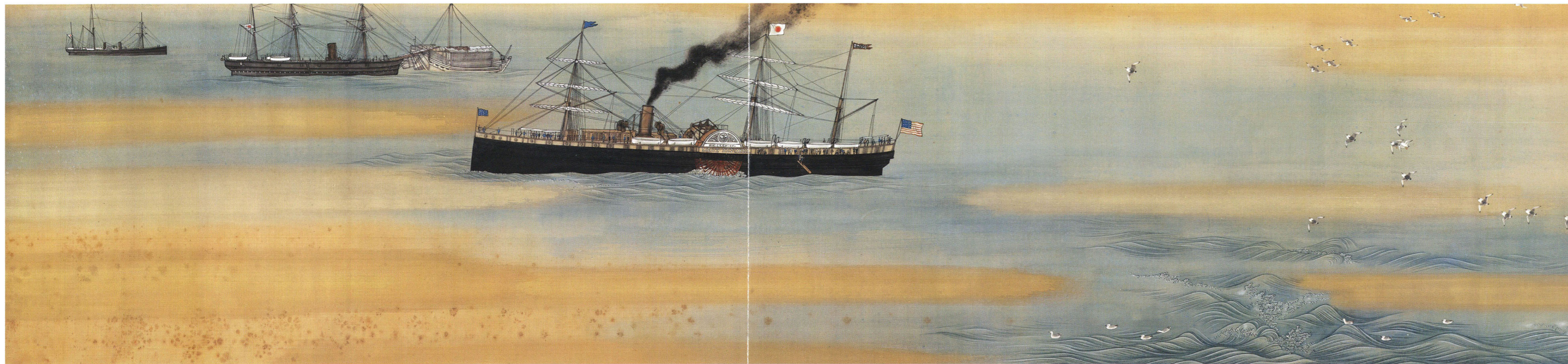
この日任命された総裁、議定、参与の三職が明治天皇臨席の小御所に集い、徳川慶喜の処分について議論を交わした。山内豊信(容堂)が慶喜の朝議参加を主張したのに対し、岩倉、大久保は慶喜の辞官および領地返上を主張し、真っ向から対立した。最終的に岩倉らの主張が通り、慶喜には辞官納地が命じられた。



特命全権大使岩倉を筆頭に、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文ほか留学生を含めた54人の使節団

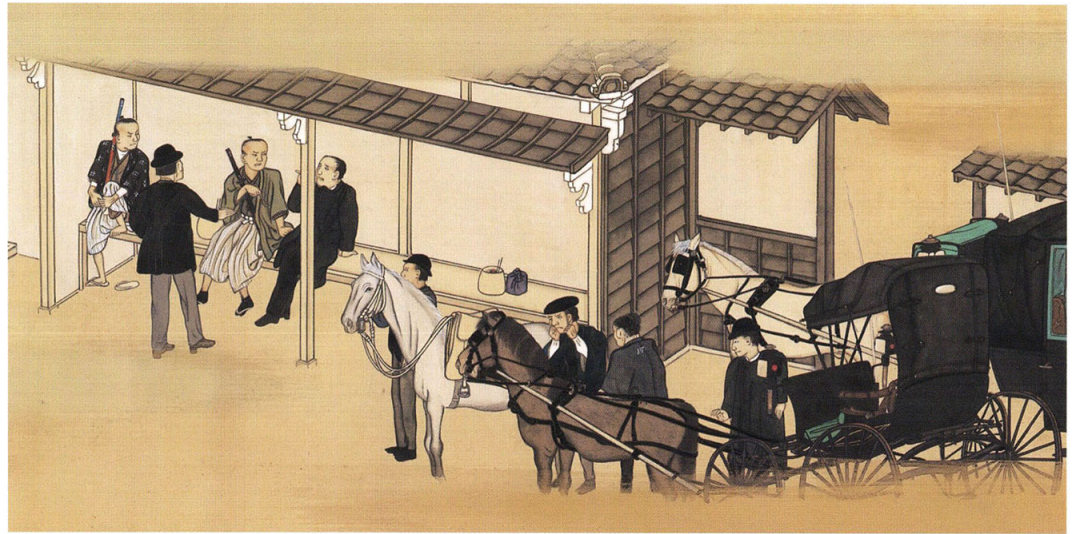


明治4年(1871)11月、岩倉使節団横浜港より出帆。

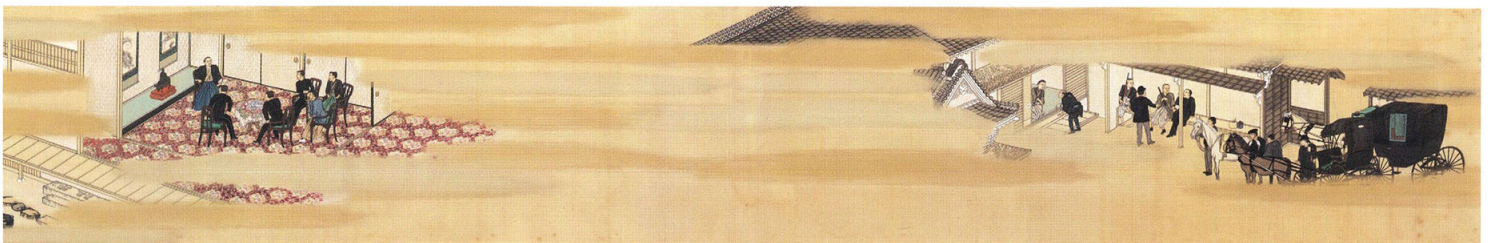


太平洋会社の郵船アメリカ号

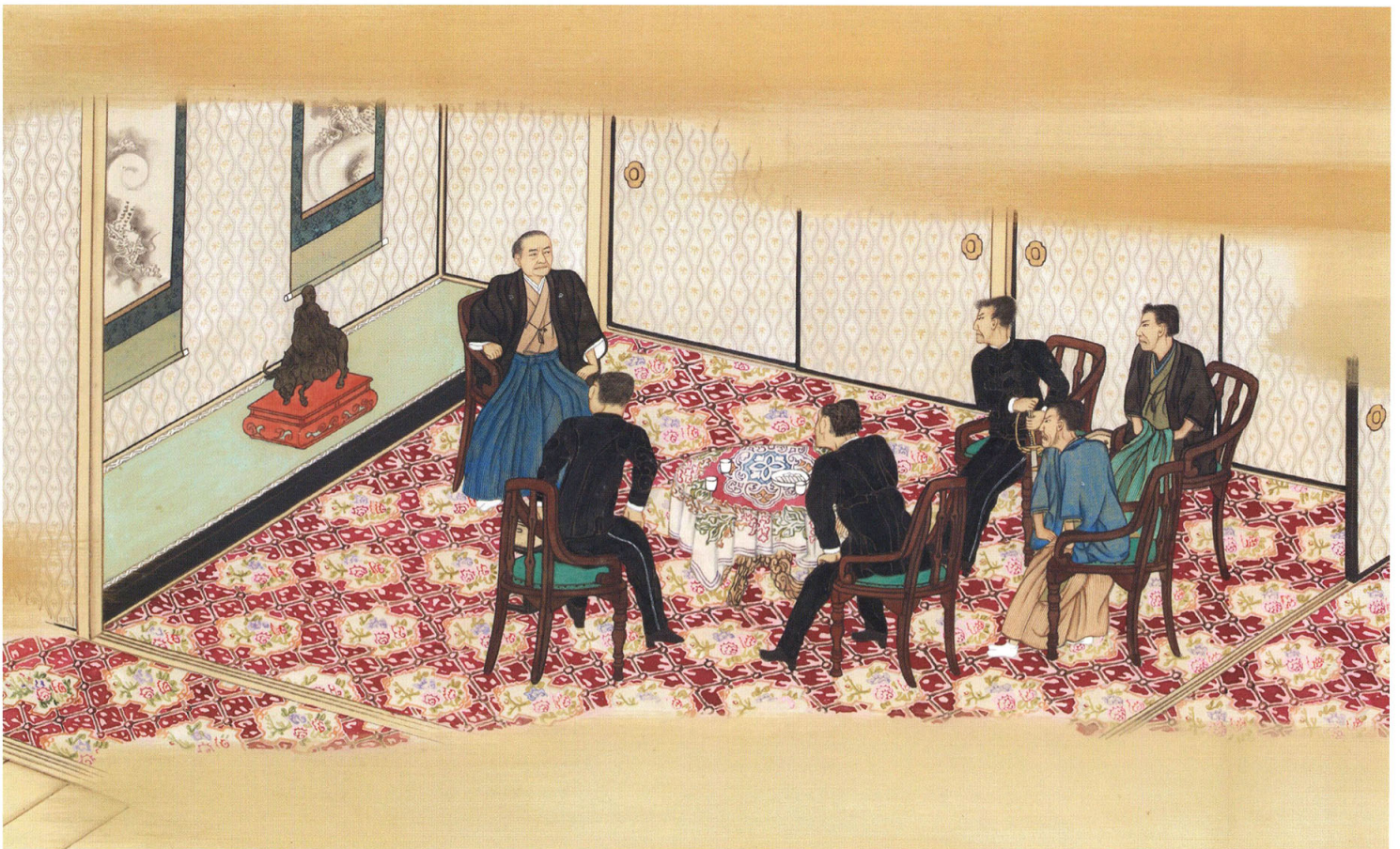




岩倉邸入口 (下右部分拡大)



第17巻



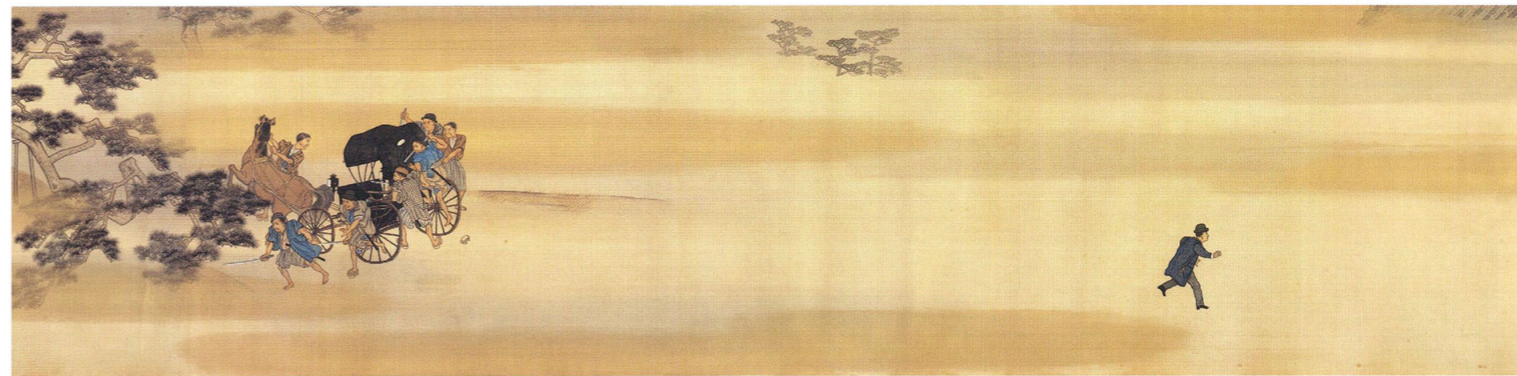
明治6年(1873)10月、太政大臣三条実美の代理となり、自邸において西郷隆盛、板垣退助、副島種臣、江藤新平、桐野利秋らの征韓論を断固として退ける。
(上左部分拡大)



明治元年(1868)9月20日に京を発した御東幸に供奉し、10月13日皇城(旧江戸城)に到着。



第15巻



明治7年(1874)1月14日夜、赤阪喰違坂で暴徒の襲撃に遭う。

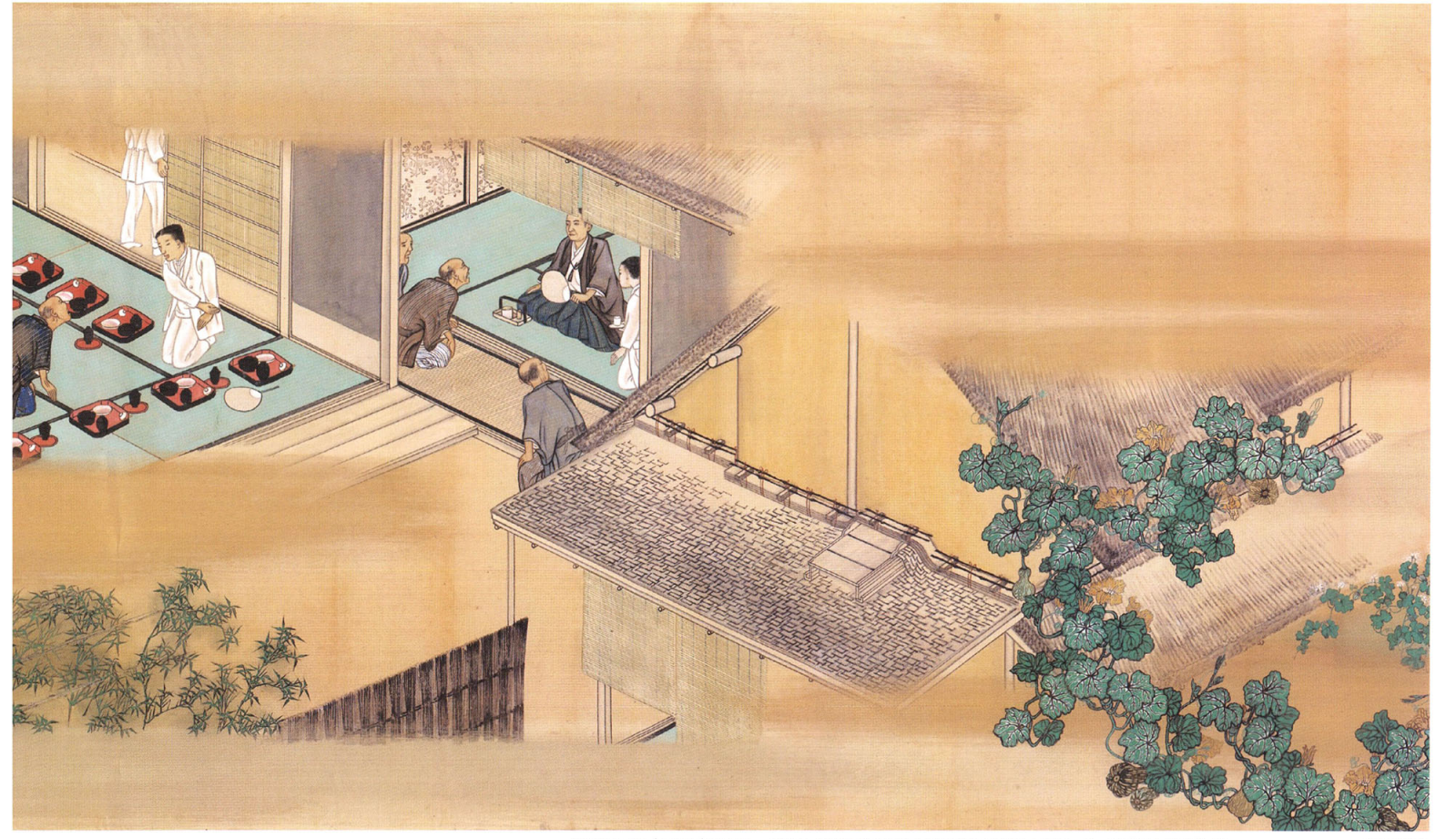
第18巻



岩倉は皇居の濠に身を隠し、難を逃れる。(上左部分拡大)

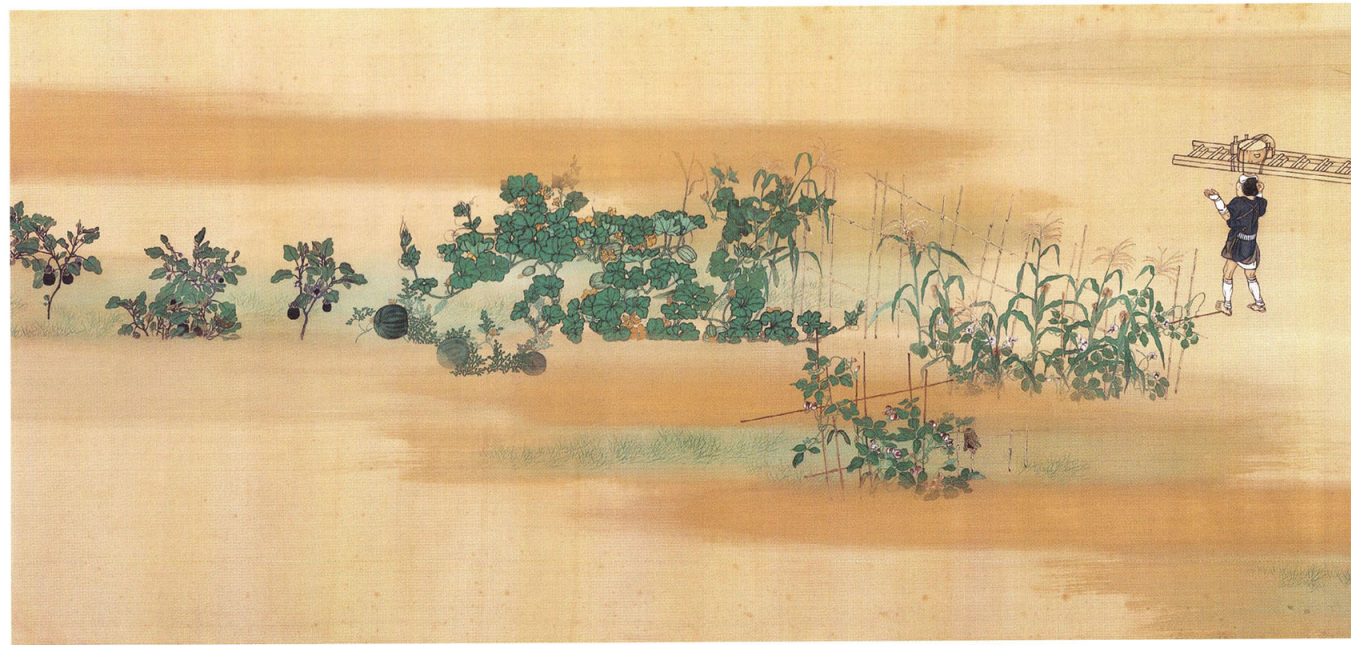


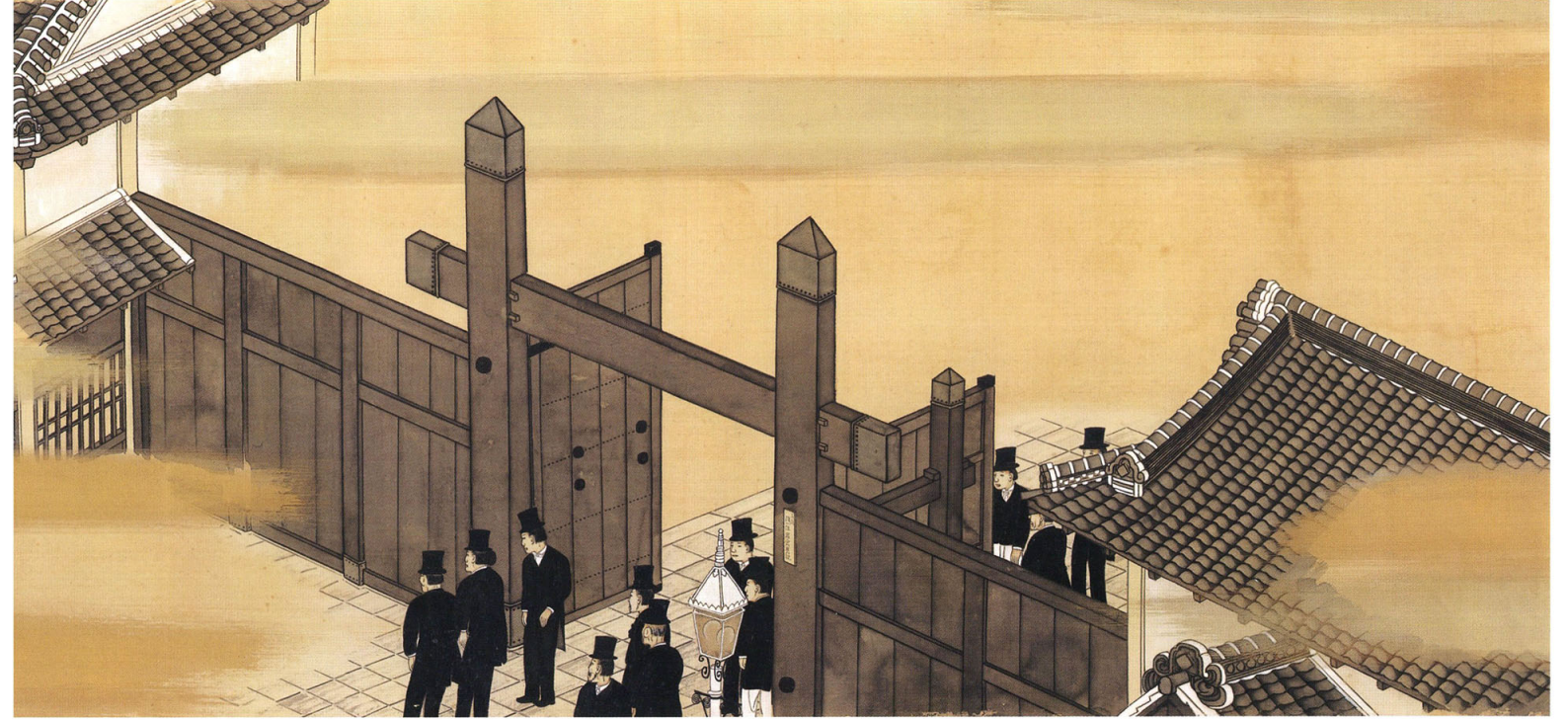
暗殺を謀ったのは征韓論支持派の高知県士族ら(上左部分拡大)



明治9年(1876)12月、岩倉村別荘に村民を招き数日にわたり宴会を催す。

第19卷





東京馬場先門内の岩倉本邸玄関



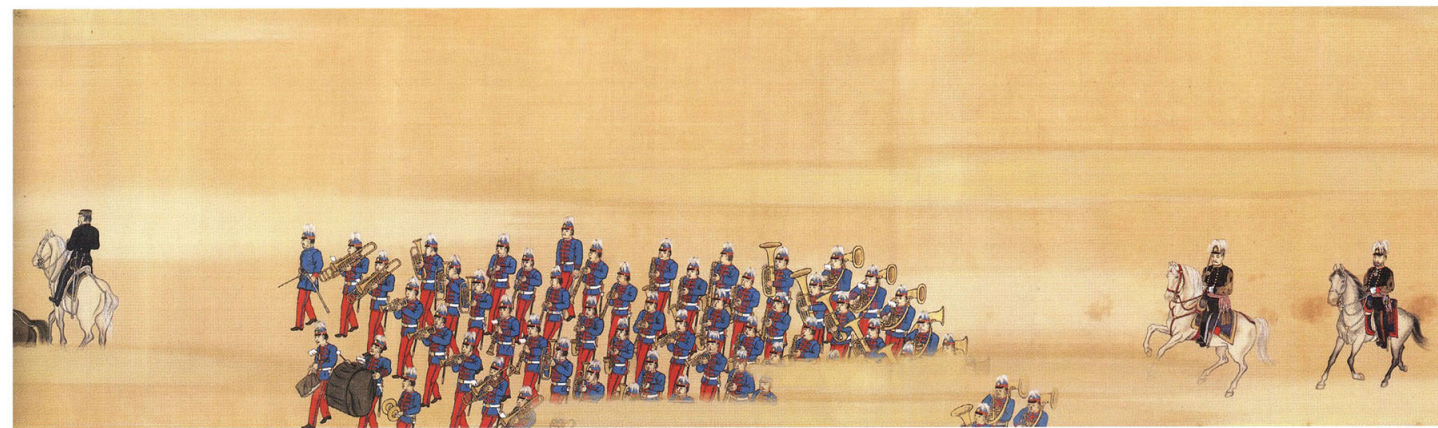
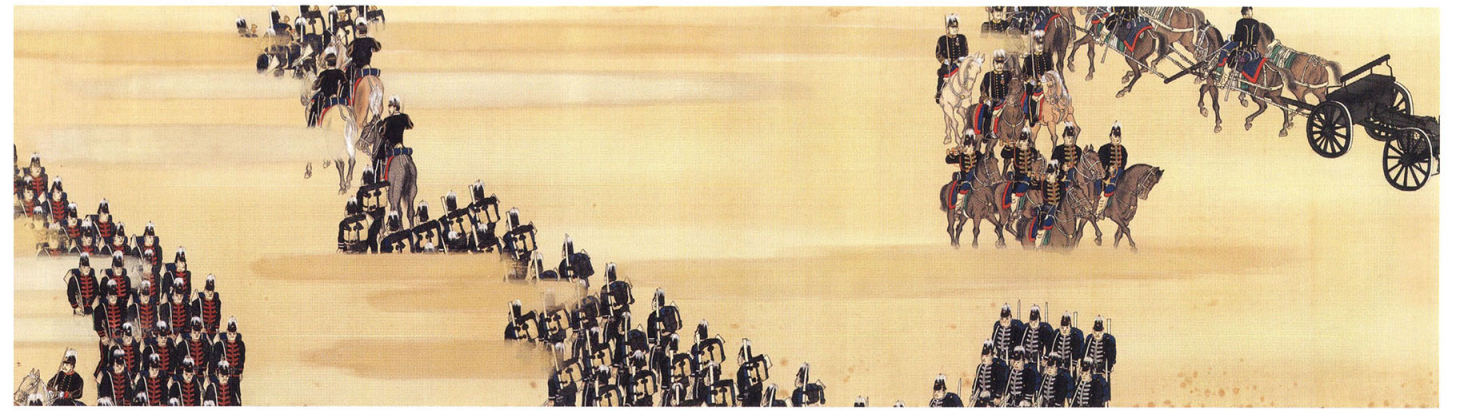
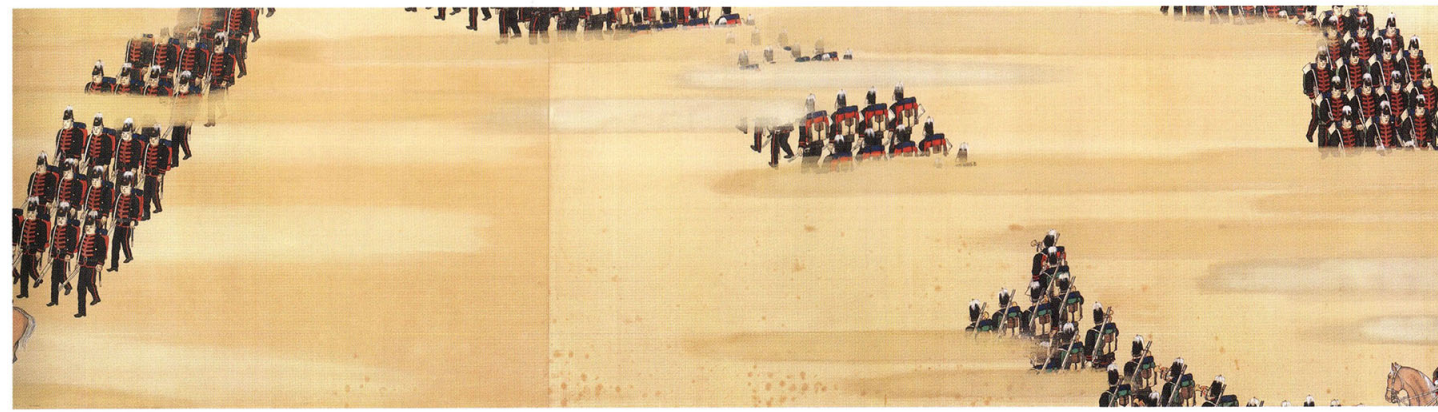
急報を受け護衛の兵が揃うのも待たず飛び出した、明治天皇の乗る鳳駕

明治16年(1883)6月、京都御所保存のため、京都に出張していた岩倉は体調不良となり、東京に戻り療養の身となる。明治天皇は、侍医のベルツらを派遣し診察にあたらせ、また岩倉邸に臨幸し病状を親問する。7月19日、岩倉の病状急変の報を受けると、急遽鳳駕を命じ岩倉のもとへ臨まれた。明治天皇に具合を問われた岩倉は「臣は陛下の萬歳を祈り奉るのみ」と答え、君臣ともそれ以上言葉を発することができず向かい合うのみで、見守る者たちの涙を誘った。



明治16年(1883)7月20日薨去。同月25日、日本初の国葬が執り行われる。

第21卷



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治天皇を支えた二人

二条実美と岩倉具視 — 一代絵巻が物語る幕末維新

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 66

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十六年七月十九日発行

© 2014, The Museum of the Imperial Collections